

北京下町物語

劉心武著

蘇琦訳



北京下町物語

劉心武著
蘇琦訳

譯者略歴

蘇 琦 (そき/Sū qi)

1928年生まれ。1949年、華北大学卒業後、北京放送局勤務、日本語放送を担当。
1955年より中国対外文化連絡委員会、アジア・アフリカ文化研究所に勤務。1966
年より、北京第二外国語学院・日本語科主任、学部長、副学長を歴任。現在、同
教授、中国日本語教学研究会副会長、中国翻訳家協会理事、横浜商科大学交換教授。
著書：『日語口訳教程』（中国国家教育委員会賞受賞／中国商務印書館刊）ほか。
訳書：老舍「茶館」（「テアトロ」所収）、『魯迅の物語』（共訳、北京外文出版社刊）、
『毛沢東選集（第1～4巻）』（共訳、同前）、『毛沢東詩選』（共訳、同前）、
蔣子竜『鍋釜交響楽』（恒文社刊）ほか多数。



北京下町物語

定価 2,800 円

1993年2月20日 第1版第1刷発行

著 者	劉 心 武
訳 者	蘇 琦
発行者	池 田 郁 雄

発行所 株式会社 恒 文 社

〒101 東京都千代田区三崎町3-10-10

電 話 03-3238-0181 (販売部)

03-3238-0164 (出版部)

振替口座 (東京) 5-35824

印刷・製本／共同印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、お取りかえいたします。

©Kobunsha Co., Ltd., 1993/Printed in Japan

ISBN4-7704-0774-2 C0097

北京下町物語——目次

プロローグ——百年前より、一九八二年十二月十二日まで……………9

Q、このくだりは読んでもよし、読みとばしてもよし 9

第一章 卯^うの刻——午前五時～七時……………21

一、鐘鼓楼近くに住み、結婚式を挙げようとする一家
人一倍苦勞しているのは？ 21

二、地安門大街からやってきた手伝いのコックさん
なぜだか急須をもらおうとしなかった 26

三、悩みをかかえた京劇の女優
花嫁の出迎えをたのまれて…… 35

四、母屋に住む局長一家、
自家用のトイレがない 48

五、女子大生の片想い
開いては好青年 58

第二章 辰^{たつ}の刻——午前七時～九時……………71

六、人にいやがられる親切者 71

七、絶えない嫁姑のいざこざ
手伝いのコックにも秘めた想い 81

八、結婚できるラマ僧 90
ラマは既婚者でもなれる

九、嫁迎えを断わってきた京劇の女優 98

十、ある靴直し屋
望んでいる嫁は 112

第三章 巳^みの刻——午前九時～十一時……………133

十一、必ずしも幸福でない新郎 133

十二、おみやげをどっさりかかえた村娘 145

十三、披露宴にやってきた番外の客
当時の乞食集団とは？ 158

十四、ようやく奥入れする花嫁
愛想のない店員 176

第四章 午の刻——午前十一時～一時…………… 176

十五、北京っ子の結婚 191

十六、不愛想な技術情報室長 204

十七、愚いがけぬ客
摘発状を受けとった局長 212

十八、イキのあわない田舎娘と町娘 222

第五章 未の刻——午後一時～三時…………… 245

十九、本書の主役——四合院 245

二十、ある女性のロマンス

切手マニアから手に入れたシート

257

二十一、『鑄鐘記』のことよりも、

はやくほかのことを……

290

二十二、ある編集者と文学青年の出会い

305

二十三、鼓樓のほうにやってきた不良青年

何事が起こるか

329

二十四、ひと荒れになるか、披露宴

345

二十五、摘発に失笑する総務課長

360

第六章 申さるの刻——午後三時～五時……

375

二十六、鐘鼓樓の下の「老人クラブ」

375

二十七、「どういたしました」

本書の登場人物の一人——江青

394

二十八、やっと姿を現わした新郎の兄

車への「かつぎこみ」と「かつぎおろし」

406

水道管のトラブル

二十九、「文壇の新進」に憤然となった編集者

431

三十、向かい風に出会った幸運児

444

エピローグ——申の刻と酉の刻の境い、午後五時

..... 459

三十一、時間をいかに見るべきか

輪か矢か、海にそそぐ河か、サイコロか、あるいは加速度を増している宇宙船か

459

屈折できうるものか

時は流れるが、鐘鼓楼はいつまでも残る

解説——現代中国社会の深奥を知る 田川 純三 511

北京下町物語

流れゆく時の中で、歴史を感じとった人びとに、これを捧ぐ

プロローグ

百年前より、一九八二年十二月十二日まで

○、このくだりは読んでもよし、読みどばしてもよし

いまからおよそ百年あまり前、清の光緒帝載ツァイトン 詒が即位して、まもないころのことであった。

ある月のない闇夜アム・ヤ

北京の北城にある鐘楼アム・ヤ、鼓楼からさほど遠くない貝子の邸宅から、突然、「ぎゃあっ！」と身の毛もよだ

つような悲鳴があがった。

貝子は、親王ギンワン、郡王ジュンワン、貝勒ベイロにつづく四等王侯貴族だが、そこはかなり豪壮なまへの邸宅であった。悲鳴

を聞きつけた当番の下人や夜まわりが、すわとばかりに動き出したのはいうまでもない。ここかしこにロウソクがともされ、羊角灯を片手に、邸の中が隅なく調べられた。幾重にも折れた長廊や無数の庭木、草花の生えている裏の庭園は、恥ろろんその搜索の重点であった。

空は星影ひとつなく、時折そよ風アム・ヤに軒下の鉄馬テツバが、がらがらと音をたてている。

家事一切をとりしきっている老執事も、ときならぬ騒ぎに起きたして、広間で下僕たちから報告を聞いた。各所の戸締まりに異状はない、邸内に猫一匹入った形跡さえ見当たらず、という。

そこで、先ほどの悲鳴は、邸の上空を飛んでいったふくろうの鳴き声だろうということになった。ふくろうは不吉とされている、そのまま捨ておくわけにはいかない。その場での妾の指図にしたがつて、翌日の朝はやく、隆福寺と白雲觀（ロウフクジヤウモンクワン）から僧侶と道士を迎えて、厄払いをすることになった。

すべてが正常にもどったかにみえた。こうこうとつけられた明かりがつぎつぎに消され、集まった人びとも散っていった。夜の当番はふたたび室内で当番をし、夜まわりもこれまでどおり、柏子木を鳴らしながら邸内を見てまわった。

黒い雲間から、ひとすじの淡い月の光が地上にそそがれた。

貝子邸の影がしだいに浮かび上がった。北城の家々もその影をみせだした。北城の正北端にある鐘楼と鼓楼の雄大な姿も、うすぼんやりと浮かび上がってみえる。

鼓楼はまたの名を譙楼（チヤウオウロウ）という。夜空の静けさを破って、鼓楼の太鼓の音がひびきわたった。初更である。一群の螢が楼壁のそばを飛んでいった。

いつもとなんら変わりない夜のものであった。前の夜もそうであつたし、次の夜も、おそろく変わらないだろう。

夜がしらじらと明けそめていった。

空が薄いたまご色から、淡い空色に変わるころには、北京城も深い眠りから目をさました。鼓楼前の大通りには、店舗が軒を連ね、業種によつて異なる、独特な形をした色鮮やかな布看板が、そよ風にゆれる。騾馬（ロバ）のひく二輪車が道を行きかう。鉄張りの車輪が石だたみの上をきしみながら行く。茶湯（チャウ）売りや豆腐（トウフ）脳（ノウ）売り、焼芋屋は、いうまでもなく、もう出そろつている。商売道具をかついた職人たちが、にぎやかに呼び声をあげて通る。「桶屋でござい！」「はんだ、はんだづけ！」。花売りの女たちは路地の中に入つてきて、なまめかしい声で呼びあげる。「芍薬（シヤクヤク）、よりどりみどり！」。わざと鼻と目のあたりを白く塗つ

た門付けが、シンバルなどを鳴らしながら、よくまわる舌で物乞いをしている。中でも「風変わったのが、ねずみ取りの物売りである。たいていはコンビになった二人が、ねずみがものをかじっている画を白い紙に描いた小旗を持ち、後先になつて歩く。前の者がひやがれた声で「ねずみ落とし——ねずみ取り！」と叫べば、後の者が洞間声で受けて立つ。「ねこいらす！ 小銭でねずみ退治！」……。

鐘鼓楼からそう離れていない南西方に、有名な什刹海がある。「海」とはいつても、実際は浅い湖で、湖面の半分には蓮が植えられ、あと半分は田んぼになっている。この「海」のまわりには昔寺院や廟がたくさんあったので、什刹海と名づけられたという。什刹海はまた前海と後海に分かれ、二つの「海」にはさまれたところに、銀錠橋と呼ばれる小さな石橋が一つある。橋のたもとは、豆汁を売る小さな店が一軒あった。

「豆汁」は豆乳とはちがう。それは春雨を作るときにできる残り汁である。こう聞いただけでも、どんなにお粗末なものであるかわかるというのだが、それをさらに発酵させて、濃い酸味のあるものにしたのが、豆汁である。飲みつけない人たちは、わけでも南方から北京に移ってきた人たちは、ほんのひと口すすっただけで、吐き気をもよおしそうになる。ところが北京つ子にとっては、それは安くておいしい熱い飲みもので、じつにたまらぬそうである。百年たつたいまでも、かなりの北京つ子は豆汁に目がない。長いあいだ海外に在留している北京生まれの人たちも、外国でさんざんごちそうを食べているだらう。北京にもどってきて真先に食べたいものはと聞かれると、「何をおいても、熱い豆汁を飲みたい」そうだ。

さて、話をもとにもどそう。当時、銀錠橋のたもとにあったあの小さな店の豆汁のうまさは、かなりの評判だった。店は五十をこえた老夫婦が営んでいた。その豆汁はきれいに漉して、ほどよく発酵され、色といい、味といい、確かなものである。それに主が商売上手で、客の身はなつていろいろと気をくばる。

家運の傾いた旗人（5）のおばあさんなどは、一文でも節約しようと、よく煮えたつた豆汁は買わず、生のを

買っていく。大きな器に入れてもらい、帰ってからわかして飲むというわけだ。

老夫婦はこういう客にたいしても、白い目で見たりしない。ほかの客と同じように、笑顔で愛想よく応対する。

また、北京っ子は熱い豆汁を飲むとき、必ずといっていいほど、漬けものや焦圈ジャウワン（シヤオベン）、焼餅シヤオベンを食べるが、この店の漬けものは、色もよく、見た目もよく、味もいいとくる。千切りにした香の物には、辛味がよく利いたものもある。同じ千切りでも、太めのもあれば細めのものもある、といったぐあいだ。また、サイの目に刻んだかぶら菜に、唐辛子油をかけただけの、あっさりした香の物も出す。暑い夏のさかりになると、これを氷で冷やし、いつでもとり出せるようにしてある。

要するに、ごくありふれた野菜にいろいろと手を加えて、おいしく作ってあるのだ。ゴマをまぶした焼餅を二つに割って、いかにもおいしそうに揚げた焦圈ジャウワンをその中におしこみ、それをかじりながら、あの湯気の立つ豆汁をすすするのは、好きな人には、まさに天にもものぼる心地にちがいない。

ところが数日前、この豆汁売りの夫婦が、とんでもない災難にひきまわされた。

夫婦ふたりには、十六歳になる一人娘がいた。目に入れても痛くないほどの可愛がりようだった。店のことは一切させず、なんでも二つ返事で聞いた。娘はとても器量よしだった。もともと、当時の審美眼から見てのことだが。うりざね顔に切れ長の目、鼻すじはやや低く鼻先も丸い。口もとは、それこそサクランボのようにならしく、上唇はくっきりとM字型になっている。あごの右よりには、ほどほどのほくろが一つあった。

時はリラの花咲く初夏の候であった。母親は娘を連れて豊台にある実家へ帰っていたが、その日、そこからもどつてくるところだった。什刹海にさしかかったときは、もう夕日も沈んでいた。湖面はすっかり蓮の葉におおわれ、夕風にざわざわと音をたてている。湖畔のしだれ柳の糸が娘の頬をなぶり、腰にはさんだハ

ンカチや檳榔^{びんろう}の香袋にまつわりついた。娘は思わず立ちどまり、かすかに息づきながら、母娘^{ははなな}してしばらくそこでひと息をついた。あと二つ折れたら銀錠橋につく。

だが、母娘がそこで立ちどまったのがいけなかった。その南側は緑一面の湖で、通り一つ隔てた北側には、「会賢楼^{かいせんろう}」という二階造りの有名な料理屋があった。黒地に金文字、そして下のほうに赤い布をぶらさげた看板⁽⁸⁾を軒から吊るしている。ひと目でそれと知れる料理屋である。二階も階下^{した}も部屋数が十二ある。造りもじつに入念で、すべて煉瓦をすりあわせ、目をきっちりあわせている。階上には、いまならさしずめバルコニーにあたるゆつたりとした縁がある。手すりは緑色だった。個室の上客は、そこから景色を眺めながら酒をくみかわす、というわけである。

運の悪いことに、そのとき、そこで酒をあおっていたのが、見るからに輕佻浮薄^{けいちょうふはく}な男だった。男は柳の糸の合い間から、たちまち豆汁売りの娘に目をつけてしまった。

男は書き出しのところでふれた、あの貝子邸の主、つまり貝子その人であった。いつも藍色の舶来のおかいこぐるみで、手には大きな鉄扇を持っている。広げると半円以上に開くその鉄扇には、真っ赤な血の色をした花むらに、黒い蝶が一羽舞っている図が描かれている。男は十本の指に、少なくとも五つの指輪をつけていた。しかもそのうちの二つが、かぎ針つきの鉄の指輪⁽⁹⁾だというから、いったいどういうたちの男か、説明するまでもないだろう。

娘はとんだ災いが降りかかるなど知るよしもなく、湖のほとりでうっとりと足を休めていた。その日、娘はうす紫のひとえを身につけていた。緑一面の湖水を背にして、そよ吹く夕風の中に立つその姿は、蓮の花の精かと見まがうほどだった。ほつれる髪をときどき、たおやかな指先でかき上げている。その楚々^{そそ}たる風情を見ただけで、貝子はもう、とろけそうになっていた。

まもなく、母娘は家に帰りついた。親子三人がくつろぐ間もなく、貝子が大勢の手下をひきつれて押し入

つてきた。貝子は、自分の身分を明かせば、妾どころか、女中を兼ねた妾として差し出せと言ったとて、よもや否^{いな}とは言うまい、とたか^{たか}をくくっていた。

娘と母親がふるえ上がって奥へ身をかくしたあと、父親のほうは顔色ひとつ変えず、きっぱりと断わってしまった。

「へえ。あの娘は手前^{てまへ}ども夫婦のたった一人の娘でございます。分相応のところから婿をとって、この小さな店をやっていたいたら、もうそれで満足でございます。おっしゃるような大それた考えは毛頭ございません。ひらにご容赦ねがいます」

貝子とその手下どもは腹をたててひきあげていった。

惨劇が起こったのは、その翌日の朝早くであつた。気の毒な娘はふるえおののき、親子三人ひと晩じゅう、まんじりとしなかった。それでも、なんとかなるかもしれないと、一縷^{いちろう}の望みを捨てなかつた。朝の光が窓からもれるころには、娘も起きだし、当時ではかなり値のはる鏡——この家では大事なものの一つとされていた——に向かつて、けだるげに朝化粧をしていた。そのとき、貝子邸の手下が門をけ破つて押しこみ、有無を言わず、娘をひつさらつていこうとした。娘は泣きだし、必死になつてもがいた。作業場で豆汁を漉していた両親は声をききつけてとびだしてきた。娘を救いたい一心で、父親は前後も考えずとびかかつていったが、荒くれ者の振りおろした鉄棒で、脳天をひと打ちされ、その場で氣を失つてしまった。玄關のしきいにつまずいてころんだ母親が救いをもとめて大声をあげたときには、娘はもう馬車の中に押しこまれていた。隣近所の人たちが騒ぎを聞きつけてかけよつてきた。はじめのうちこそ、何をするのだ、と言つてつめよつた人たちも、前に立ちふさがった奴に、「やい、やい。俺たちを知らねえのか。貝子さまの命令で、お屋敷から逃げだした妾をひつ捕らえているんだぞ。よいけいな手出しをする奴は、まず自分の首がいくつあるか勘定してからかかつてこい」と凄まじると、手も足も出ない。